’95／年報

平成７年度

No. 3

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

はじめに

本資料館は開館してまる３年になろうとしています。考古資料館というかなり専門的な施設ではありますが、開館以来の入館者はすでに３万人を越えようとしております。これは原始・古代の文化を通して、それが送るメッセージに耳を傾け、新しい２１世紀を展望しようとする人びとの最近の風潮と無関係ではないと思います。

ただ単に展示をして人びとの来館を待つというのではなく、各種の講座や体験学習を催して、それらを通して遠い時代の人びとと技術・思想・文化を共有して、人びとの社会やそのつながりのあり方を模索してきました。これらの催しは一定の成果をおさめ、ますますます拡がっていく傾向がみられます。「縄文に遊び、縄文に生きる」ということが、高度に発達した文明社会のなかで求められていることを、数々の催しを通して痛感いたしました。

今後はさらにこれまでやられなかった「縄文の衣服つくり」や「縄文の音の世界」などにも挑戦しようとスタッフ一同で準備をすすめています。展示にしてもまだまだ不充分な点が多く、「わかりやすさ」からしてもほど遠い点も多くありますが、少しずつ改善しながら、地域の方々から親しまれる地域にねざした資料館づくりとそれを全国へ発信する役割をになっていきたいと思っています。

１９９５年度における１年のあゆみをまとめ「年報」として発行いたしますが、どうぞ今後ともよろしくご指導・ご鞭撻のほどをお願い申し上げます。

１９９６年３月

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

館長　川崎利夫

目　　次

1．展示の概要 ---------- 1
　（1）常設展示 ---------- 1
　（2）特別展・企画展 ---------- 2
　　・開館3周年記念特別展「よみがえる縄文文化」
　　・第4回企画展「やまがた古代の役所」
　（3）収蔵品展 ---------- 4

2．教育普及活動 ---------- 5
　（1）公開講演会 ---------- 5
　（2）体験学習事業 ---------- 5
　　①縄文住居つくり教室
　　②縄文土器つくり教室
　　③縄文月見の宴
　　④縄文住居の模型作り教室
　　⑤第2期やさしい考古学入門講座

3．資料の収集・保管 ---------- 9

4．資料の活用 ---------- 10
　・館内利用の状況
　・刊行物一覧

5．入館状況 ---------- 11
　・月別入館者一覧表
　・主な入館団体一覧
　・来館者アンケート

6．管理及び運営 ---------- 15
　（1）今年度の職員・組織 ---------- 15
　（2）運営協議 ---------- 16

7．受贈資料・図書・書籍 ---------- 17

8．日誌抄 ---------- 23

付編　高畠町味噌根窯跡群第一次発掘調査の概要

１．展示の概要

（１）常設展示

つぎの４つのテーマによって展示が行われて、展示室中央に高畠町押出遺跡より発掘された住居跡をもとに、縄文時代のくらしぶりを復原したジオラマをすえている。

・置賜のあけぼの　（ロビー展示）

置賜地方で発見された最古の人類遺跡である飯豊町上屋地遺跡の前期旧石器を冒頭に、小国町岩井沢・東山・湯の花など各遺跡の石器が展示され、後期旧石器時代から最終末の細石器に及ぶ。壁面には、当時の生活を描いたイラストが揚げられ、理解を助けている。

・大谷地をかこむ遺跡

白竜湖を中心として南にひろがる平地は、かつて一大湿地帯であった。その周辺には、日向・大立・一の沢・火箱岩（いずれも国指定史跡）など縄文のはじまりをつげる草創期の遺跡が分布する。主として日向洞窟遺跡の土器片と石器、南陽市月の木の早期の遺物、縄文前期初頭の米沢市八幡原Ｂの完形土器、高畠町福間田遺跡の遺物などを展示する。

・縄文時代のタイムカプセル

大谷地の地下２メートル、高畠町押出遺跡から発掘された彩文土器や漆塗りの珍しい５，５００年前の木製品、縄文クッキーなどの他、縄文中期から晩期にいたる資料を並べ、絵や写真・解説がそえられる。豊かですぐれた東北の縄文文化に触れることができる。あわせて中央部には、押出遺跡の復原住居が設けられ、家族生活を再現する。

・古墳を造る人びと

弥生土器、古墳時代前期の土器が展示され、さらに本資料館の近くから発掘された横穴式古墳出土の資料が並べられ、本地域の弥生時代から古墳時代までの歩みが理解できるようになっている。

今年度、遊佐町小山崎遺跡出土の骨角製品（縄文後期）、押出遺跡の復原木製盤、村山市宮の前遺跡の縄文晩期遺物、佐賀県吉野ヶ里遺跡の復原銅剣など試みに展示に加えてみた。

今後、考古年表を作成するとともに展示内容の一部手直しが必要と思われる。

（2）特別展・企画展

・開館３周年記念特別展「よみがえる縄文文化」　開期　４月２７日～７月３０日

いま人びとの大きな関心を集めている縄文文化について、県内出土の優品を一堂に集め、縄文人の息吹きに接して、これからの文化のあり方を見つめ直していくことをねらいに開館３周年を記念して開催された。

これには、山形県埋蔵文化センター、山形大学教育学部、致道博物館、明円寺尚古館、米沢市教育委員会などの各機関よりご協力をいただいている。

「縄文時代の幕開け」「縄文文化の展開」「縄文文化の最盛期」「縄文文化の終末」の４つのテーマのもと、県内出土の代表的な遺物や珍しい出土品が展示室をかざった。舟形町西ノ前遺跡の日本最大の美しいフォームの土偶が中央のケースにかざられ、年代をおって各時期の特徴が把握できるように展示された。

高畠町日向洞窟遺跡の最古の土器や石器、ついで火箱岩や大石田町大畑山遺跡や南陽市月の木Ｂ遺跡の早期土器片、米沢市柿の木・二夕俣の尖底土器が並ぶ。そして米沢市一の坂ロングハウスの資料、押出・吹浦などの前期土器が飾られる。縄文中期の雄大豪壮な土器は、舟形町西ノ前、最上町水木田などで、他に同時期の土偶や石器も展示され、力強い縄文の息吹きを感じさせるものであった。

そして東北縄文時代の最後をかざる亀ヶ岡文化の粋ともいうべき繊細華麗な土器は、村山市宮の前遺跡の最近発掘資料が主である。なかに赤色顔料入土器や人面付土器などもあり目を見はらされた。同時に羽黒町玉川遺跡出土のひすい製玉類や砥石、庄内出土の文様ある石棒、遊佐町三崎山出土の青銅刀子（レプリカ）など珍しいものも展示された。

開期中に展示にあわせて、青森県三内丸山遺跡対策室の岡田康博氏の講演会があり、「よみがえる縄文文化」の図録も発行された。

「よみがえる縄文文化」展示状況

展示資料から西の前遺跡
出土の日本最大の土偶

・第４企画展　「やまがた古代の役所」　開期　１０月１日～１１月３０日

東北において律令政権の進出によって７世紀後半に陸奥国、７１２年に出羽国が置かれて、律令体制にくみ入れられ、日本国家の一部となった。それによって国には国府が置かれ各郡には郡衙が設けられ、人びとを支配する行政府として役所も整えられた。

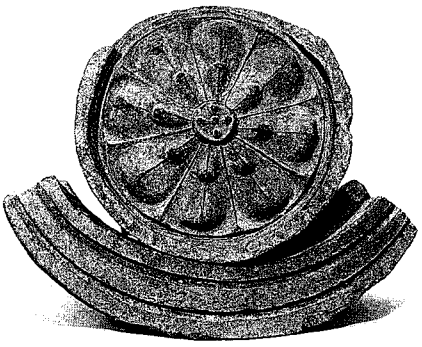
陸奥国府は多賀城で、７２０年前後に政庁が置かれたが、東北歴史資料館のご厚意により多賀城創建期の瓦、第３期の瓦、陶硯、施釉陶器や土器類などの資料を展示した。つづいて９世紀初頭に築かれた出羽国府である酒田市城輪柵遺跡出土の柵木・円柱・瓦類・墨書土器、また周辺の山海窯跡から発掘された陶硯・土器類を展示し、国府のすがたをイメージでできるように復原のイラストや写真類を壁面に飾った。これが第１部「国府のすがた」で、第２部は「郡家の移りかわり」のテーマで構成をはかった。

郡衙については、まだ不明な点が多いが、一応の仮説として置賜郡衙の変遷をとりあげた。それは小郡山（高畠町）→郡山（南陽市）→大浦Ｂ（米沢市）→道伝（川西町）というものである。特に大浦Ｂ遺跡の漆紙文書（写真）、道伝から発見された寛平９年（８９５年）の木簡をはじめ、墨書土器や陶硯を展示して、律令政府による地域支配のすがたを明らかにしようと試みた。

第３部を「人びとのくらし」として、とくに米沢市笹原遺跡にスポットをあてて、一軒の竪穴住居から出土した土器類、木製の鋤などを展示し、壁面には「貧窮問答歌」や当時の住居内の復原イラストなどを掲げ、農民たちのくらしをうかがうことができる展示にした。

開期中の１０月７日には公開講演会を開いた。講師は酒田市教育委員会の小野忍氏で、「古代出羽の役所」と題するものである。なお図録「やまがた古代の役所」を刊行した。

「やまがた古代の役所」展示状況



展示資料から多賀城創建期の瓦

（３）収蔵品展

特別展と企画展の間をぬって、本館保管資料を展示する収蔵品展を開催した。

・「高畠の古墳時代」　８月４日～９月２７日

高畠町内には南原や寝鹿など大きな古墳時代集落跡が発掘調査され、古墳時代のムラの様相の一端を把握することができる。それらの遺跡の出土遺物は、本館で保管しているが、各種の土師器・須恵器・木柱痕などを展示し、その写真・実測図なども掲げて、千数百年以前の村の一端に触れるように試みた。

また安久津古墳群、源福寺古墳群、二色根古墳群、山の神古墳などの横穴式古墳より出土した土器や鉄製直刀・鉄鏃を展示し、当時の有力者の墓である古墳の実態にせまろうとした。

・「置賜のやきものの移りかわり」　１２月６日～４月２１日

この地域で、粘土を用いてやきものが始まった１万２０００年前の縄文草創期から縄文各期、弥生土器片、土師器・須恵器、中世の陶器、近世の成島焼まで、焼きものの変りかわりがわかるように展示し、補助資料もそえて理解をはかるようにした。

一部弥生土器や平安時代の土器、中世の陶器など資料が少ないこともあって、すべてを網羅したものにはならなかったが、空白の部分は写真などで補った。生活と深いつながりをもつ焼きものが時代ごとにどのような特色をもつか、参観する人びとにわかってもらうことをねらいとしたものである。

収蔵品展「やきものの移りかわり」

2. 教 育 普 及 活 動

（1）公開講習会

6月10日　「三内丸山遺跡と東北の縄文文化」　受講者１６０名

講師　青森県教育庁文化課三内丸山対策室　岡田　康博氏

開館３周年記念特別展「よみがえる縄文文化」特別講演会として行った。定員の倍を越える受講者が集まったように、全国的に話題となり、縄文時代について現在もさまざまな議論を起こし続ける遺跡である。

調査担当の一職員としての立場から、「取材を一切制限しない」ことにより注目が増し、遺跡を保存するに至った経緯から、遺跡から読み取ることのできる新たな縄文文化の考察までを述べられた。

なお、くわしい講座内容については、別にまとめる予定である。

10月７日　「古代出羽の役所」　受講者２２名

講師　酒田市教育委員会生涯学習課長　小野　忍氏

第４回企画展「やまがた古代の役所」に合わせた講演会である。古代出羽国の行政区域の変遷と現在の山形県域との関係、そして『日本書紀』等から読み取れる役所とその所在についての考察を述べられた。その他、城輪柵を復元(※講師によると、復元ではなく1:1の模型である)した当時の苦労話等をされた。

（2）体験学習事業

①縄文住居つくり教室（うきたむ縄文体験教室）

6月18日　参加者４１名

講師　米沢市教育委員会　手塚　孝氏

今年は、住居つくりとして、簡単なキャンプ住居作りを試みた。４班に分かれ、４棟を建てることとした。まず、歴史公園内の雑木を採集する。地面に穴を掘り、柱を立てる。これは、さすがに子供の手には負えず、大人たちの仕事となった。しかし、子供達も、屋根をふいたり、草を敷いたり、歴史公園内の草木と存分に親しんだようだ。昼食時には、土器であさり汁をつくり、出来た住居の中で縄文の雰囲気を楽しんだ。午後は、男子が、投げやり作り、女子は勾玉作りを体験した。それぞれコンテストを行い、制作物を身につけて、住居にて記念撮影をして終了した。

②縄文土器つくり教室（うきたむ縄文体験教室）

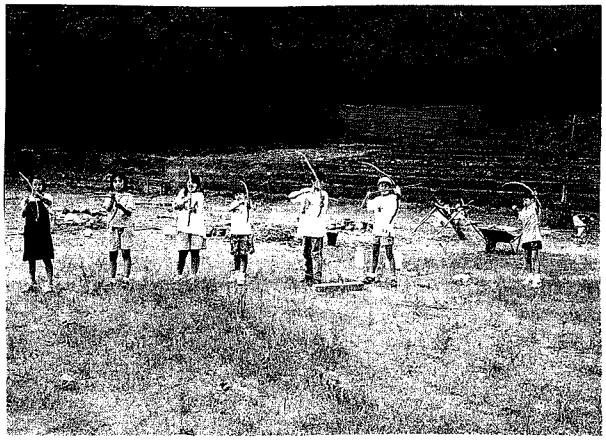
7月8日　土器作り　　参加者３３名

8月6日　野焼き　　参加者２０名

講師　陶芸家　水野　哲氏

１回目は、施文具作りと粘土の成型、２回目は、ほぼ１カ月間乾燥させた土器を焼く作業である。この教室も３回目となり、繰り返し参加される方がいるのは、当館としてもうれしいものである。

簡単な講話のあと、展示室を一周して、作りたい土器のイメージを固める。２人づつ組んで施文具を作るが、しっかりと撚るには以外に力がいる。数種類の施文具を作った後、粘土による土器作りが始まる。方法として、輪積み、巻き上げ、変わり輪積みで作るが、なかなか思った通りにいかず、何度もこね直す人もいた。日常の道具を当たり前に“つくる”ことの難しさ、縄文の人々の技術に頭の下がるひとときである。



野焼きは早朝５時30分から、土の水分を抜くめ火を起こした。ゆっくりと乾燥させた土器に水分は大敵である。雨の心配をしながら火を焚き続け、火の回りに土器を運び出すタイミングを図った。幸い雨は降らず、時間をかけ順を追って炎の中に投入された。

野焼きのほうは少々参加者が減ってしまったが、「これを体験しないと縄文土器を作ったことにならない」という講師の言葉には納得できるものがある。

③縄文月見の宴

9月9日十五夜　参加者１１４名

出演　長井市縄文太鼓

※県文化財課、県立博物館、(財)埋蔵文化財センターとの共催

今年は、全国巡回の「新発見考古速報展'95」が、県立博物館で開催されたのに合わせ、会場を県博に移し、各機関共催で行った。

第一部として、弓矢作りと、勾玉作りの二つに分かれそれぞれ制作に熱中した。天候にも恵まれ、屋外での作業だ。講師陣も、縄文の服装に身を包み、参加者たちの指導に走り回っていた。弓矢作りは、杉の枝に切り込みを入れたり、鉛をたたいてヤジリを作る。勾玉作りは、手を石の粉で真っ白にして、なかなか進まない作業に奮闘していた。

このような作業の進み具合は以外に大人と子供の差より、個人差の方が大きいのが面白い。最後に、弓矢は飛距離を競い、勾玉は出来上がりの美しさを競うコンテストを行った。

第二部は、コンテストの表彰と、縄文食の試食に始まる。今回は、米沢市教育委員会手塚氏の指導のもと、山形中央クッキングスクール校長古田久子氏に用意していただいた。メニューは縄文ナベ、カマボコ、ステーキとタレ、焼き魚、ジュースと、古代米である黒米(当館のある歴史公園内で収穫したもの)を添えた、大変多彩なものとなった。その後、場所を木立の中に移動し、夕闇の中ロウソクの火を灯して、縄文太鼓の演奏、劇団「北」の２名による、縄文詩の朗読、当館長による縄文の語りと続いた。盛りだくさんな宴となり、参加者も十分に楽しめたと思われるが、弓矢の材料である杉の枝、料理用の山ボウシの実、朴葉・枝等の準備が意外に大変であったことを最後に付け加えたい。

④縄文住居の模型作り教室

２月25日　参加者１０名

講師　米沢市教育委員会　手塚　孝氏

「小さいけれど、自分たちの家を建てるつもりで」。そう言う講師の言葉に、参加者は資料を見ながら柱や屋根の長さに小枝を切って形作っていく。紙粘土で地面を作り、その上に又木を利用して柱を立てる。梁を渡して屋根の骨組みを作り、シュロで屋根をふいて出来上がりである。竹ひごや、割り箸は材料として用意したが、改めて用意してみた自然の小枝の方に手が伸びる。少々時間が足りなく、屋根の半分は持ち帰っての作業となった。参加者が少なくて残念であったが、講師の「世界でたった一つの竪穴式住居の模型をながめて、縄文の人々の生活に思いを馳せてください」と言う言葉は、十分に届いたであろうと思われる。今回はシュロが少し足りなく、新しい体験教室を行うたびに“材料”の問題に突き当たり、あらかじめ“体験”する事の重要さを感じている。

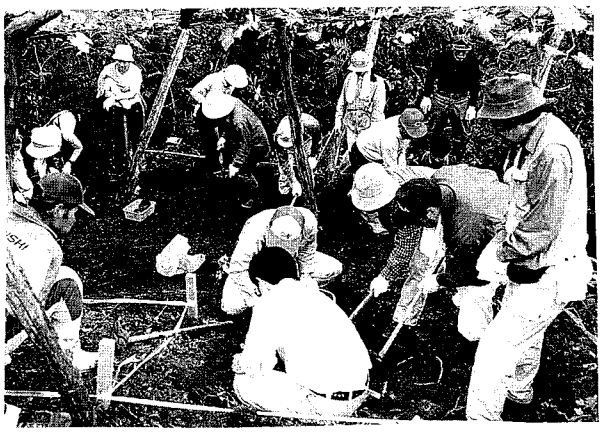
⑤第２期やさしい考古学入門講座

８月12日～12月17日(10回)　受講者４４名

「日本のやきものの流れ」

第１回	日本のやきものの流れ	川崎利夫講師
第２回	土器のはじまり	佐々木洋治講師
第３回	縄文土器の発展	阿部明彦講師
第４回	縄文土器のおわり	佐藤鎮雄講師
第５回	弥生土器の展開	佐藤庄一講師
第６回	須恵器窯の試掘(体験実習)	手塚孝講師
第７回	古墳時代の土器	長橋至講師
第８回	古代の土器	尾形與典講師
第９回	中世のやきもの	川崎利夫講師
第10回	近世山形のやきもの	板垣英夫講師

第２期の今回は、“やきもの”に焦点を絞って開催した。主に山形における流れである。要所に、収蔵品の実物を研修室に持ち出し、休憩時間には実際の出土遺物である焼き物に触れながらの講座となった。概要を追ってみたい。第１回は全体的な流れについて、第２回は町内にある遺跡(日向洞窟)からも出土した縄文草創期の土器片に始まるや　きものの文化について、第３回は縄文土器の編年から縄文の紋そのものについての解説があった。第４回は亀が岡式土器から器形と機能について、そして弥生への文様の変化、第５回は資料写真を並べ変えるテストを行うという趣向もあった。第６回は、毎期盛り込まれることとなっている体験実習である。詳しくは巻末に報告を添えたが、当日が発掘の第１日目である。入門講座受講者の外にも、協力者と実習希望者を混じえて窯跡の試掘をし、その後も、この日の有志による助力を得て発掘を進めることとなった。時間内に分かることはわずかであるが、発掘を知るうえでの導入にはなったであろう。第７回は須恵器と土師器の名称から古墳との関係、器形の微妙な変化からその編年を追う。第８回は時代からして、文献(続日本紀･延喜式)の表記からも焼き物をみることができる。 赤焼土器と土師器の違い、見分け方などについて質問も出た。第９回は中世陶器とされる六古窯の特長とかわらけ、最終回は県内における江戸末期からの陶窯の変遷と焼き物についての総括的な講話で講座を終えた。



各講師とも、日ごろの研究の成果を盛り込んだ資料をふんだんに提供され、全10回の資料のみでも非常に貴重なものとなった。今後、この資料を活用して行くことも可能性として考えられるであろう。“やさしい”と銘打って開催されたこの講座だが、第１期の感想に、「難しい」という声が多かったため、講師陣に“よりやさしく”講義していただくよう配慮していただいた。終わってみて、やはりまだ少し難しいという声もあった。ただし、それでも来年度も受講を続けたいという希望が多く、当館も受講者に支えられてより魅力的な講座となるよう努力して行きたいところである。

3. 資料の収集・保管

今年度、他の機関より移管された資料はないが、下記の資料が寄贈・寄託された。

（1）秀衡椀　　1点
寒河江市本町井田裕充氏より　　平成7年6月

（2）高畠町大字高畠源福寺山周辺出土の一括資料　　32点
高畠町大字高畠　高徳寺住職　亀井良順氏より　　平成7年7月6日

	資料名	規格等	数量	単位	摘要
1	須恵器	台付蓋	1	点	
2	〃	長類瓶	1	点	
3	灰釉陶器	鉢	1	点	
4	〃	坏	3	点	
5	土師質土器	丸底皿	1	点	
6	土師器	高杯（破片）	1	点	
7	縄文土器片	縄文中期（破片）	15	点	
8	石器片		7	点	
9	直刀	大、小	2	点	
		計	32	点	

（3）大石田町田沢ドザキ遺跡出土縄文中期深鉢型土器　　2点
天童市久野本　高橋良一氏より　　平成7年10月

（4）成島焼切立　　1点
ミソネ窯出土須恵器片　　30点
高畠町安久津　深瀬吉男氏より　　平成7年10月

（5）復原土偶　　2点
米沢市万世町　手塚孝氏より　　平成7年10月（寄託）

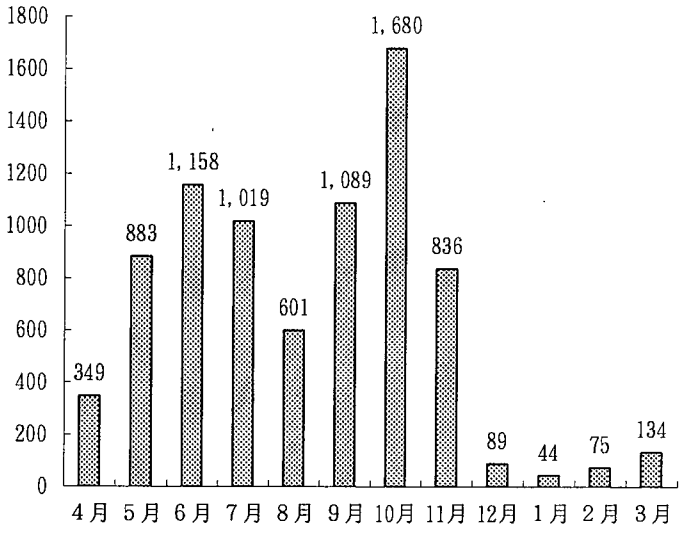
（6）味噌根1・2窯出土須恵器及び円面親片　　500点
本館が主催した発掘調査による　　平成7年12月22日

5. 入　館　状　況

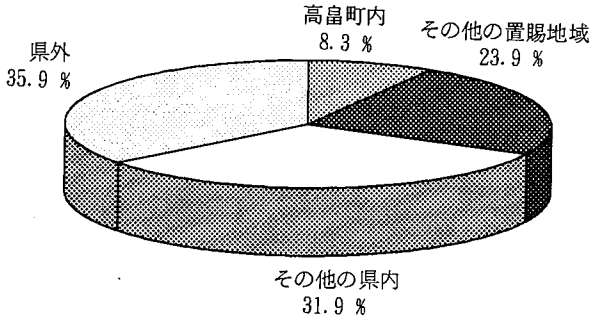
平成7年度　月別入館者一覧表　　（人）

月分	有料入館者数(人)					無料入館者数(人)					合計
	個人		団体		計	減免者数		視察その他		計	
	一般	児童等	一般	児童等		一般	児童等	一般	児童等		
4	175	110	0	0	285	18	21	25	0	64	349
5	361	101	20	0	482	48	144	149	60	401	883
6	228	46	90	121	485	67	350	254	2	673	1158
7	271	51	168	30	520	151	313	35	0	499	1019
8	317	128	30	0	475	30	52	44	0	126	601
9	189	10	83	13	295	313	410	70	1	794	1089
10	268	49	489	0	806	336	361	177	0	874	1680
11	159	12	258	0	429	114	72	221	0	407	836
12	28	1	0	0	29	0	0	60	0	60	89
8. 1	30	3	0	0	33	1	1	9	0	11	44
2	36	5	0	0	41	22	0	11	1	34	75
3	108	18	0	0	126	0	1	7	0	8	134
計	2170	534	1138	164	4006	1100	1725	1062	64	3951	7957

平成7年度月別入館者



地域別入館者の割合



（芳名簿による地域割合）

来観者アンケート

このアンケートは、平成７年度のアンケート等を回収して、その結果をまとめたものである。

（１）展示全般に関する意見

◇　整然と年代別・種類別に展示説明されている点には感心したし、驚きさえも覚えた。多くの人に是非ＰＲしたい。
　適切な保存と管理に充分注意してください。（６０代　男性　１名）

◇　山形の古墳についてほとんど見たことがなかったので改めて郷土の古い時代を知って親しみがでてきた。（５０代　女性　１名）

◇　素晴らしい展示品を拝見し、古代の人々のおおらかな生き方をうらやましく思いました。特に装飾品に精巧な穴をあける方法など、どうやってドリルしたのであろうかと思います。
（６０　代男性　１名）

◇　よく見えるようになっていたのでよかった。
　もう少し説明文を展示物の隣にあった方がいいな、と思った。
　どこから出土したのか場所の提示がもっとあった方がよかった。（１０代　男性　１名）

◇　置賜地方に多数の縄文遺跡があるのには驚いた。また、展示物が非常に見やすく、理解しやすかった。（４０代　男性　１名）

（２）施設全般に関する意見

◇　ビデオの音量をもう少し高く欲しい。（１０代　男性　１名）

◇　館内が寂しく感じられるので弱く(静かに)ＢＧＭを流したらいいなと思った。（40代男性１名）

（３）その他の意見

◇　子供が近所で見つけてきた石器のかけらと照らし合わせてみた。時代や形、模様がよく分かり、楽しかった。（４０代　女性　１名）

◇　『専門的すぎて分かりずらい』との批判の声を聞いたが、そんなに難しくなく良い内容だった。
　パネル（文字も含めて）が小さいのが残念だった。
　展示スペースが今の倍くらいあればもっとうれしい。（３０代　男性　１名）

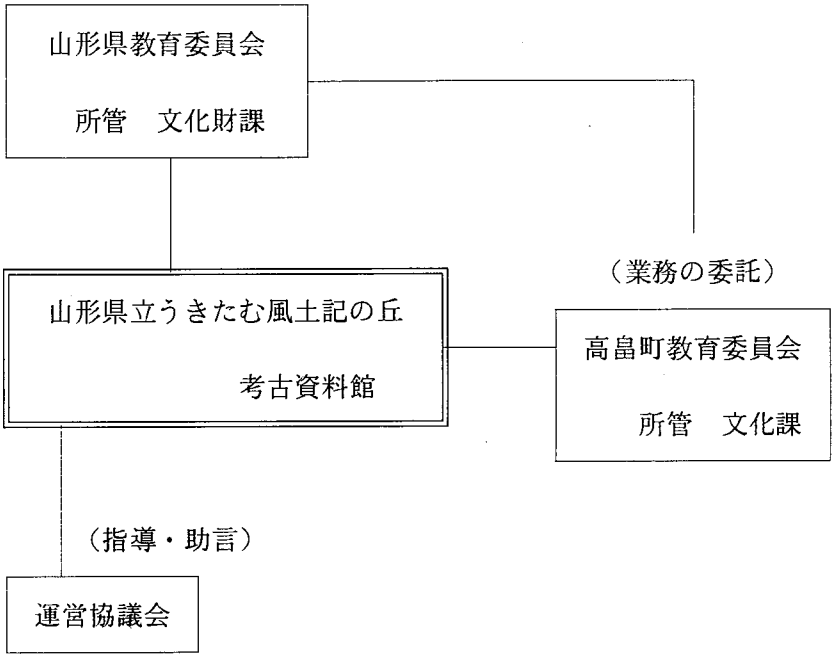
◇　大変勉強になった。これからも来館したい。（７０代　男性　１名）

◇　昔のくらし、食物、道具などいろいろ学ばせてもらった。勉強で分からないことがあったらまた来たいと思います。（１０代　女性　１名）

◇　見たことのないものがたくさんあって驚いた。古墳はあまりないと思っていたが思ったよりたくさんあったことを知りました。もう一度来たいです。（１０代　女性　１名）

6. 管 理 及 び 運 営

（1）組織・職員



県立うきたむ風土記の丘考古資料館職員名簿

職　名	氏　名	住　所	電話番号	備　考
館長(嘱託)	川　崎　利　夫	天童市中里２-３-12	0236-55-2693	
主　事	鈴　木　栄　一	高畠町大字亀岡3913	0238-52-2862	
主　事	島　津　美智雄	高畠町大字竹森4467	0238-52-0283	
嘱　託	宇佐美　みふゆ	高畠町大字下和田674	0238-56-3070	
臨時職員	舟　山　寿　子	高畠町大字深沼1912	0238-52-0466	6.12.17~7.9.30
臨時職員	山　村　紀　子	高畠町大字高畠558-36	0238-52-2809	7.10.1～8.3.31

（2）運営協議会

・運営協議会委員名簿　　（五十音順）

氏　　名	住　　所	自宅電話番号	備　　考
安　彦　好　重	山形市北山形1-6-8	0238-44-9246	山形県文化財保護協会会長
佐　藤　鎮　雄	南陽市三間通1,278	0238-40-2053	南陽市立中川中学校教頭 TEL0238-40-2134
菅　井　敬一郎	南陽市宮内3,652	0238-47-2666	前高等学校教諭
浜　田　清　明	米沢市東町3-5-22	0238-23-2318	山形県文化財保護協会常任理事
舟　山　豊　弘	米沢市矢来2-6-20	0238-52-1013	山形県博物館連絡協議会副会長 米沢市教育委員会文化課長 TEL0238-22-5111
山　崎　　正	高畠町高畠1,543-7	0238-52-1013	高畠町郷土資料館館長 TEL0238-52-4523
吉　野　智　雄	上山市須田板22	0236-74-2946	前山形市立第六小学校校長 山形市野草園 TEL0236-34-4210

委員長　浜　田　清　明　　副委員長　吉　野　智　雄

・今年度の運営協議会

第１回　　４月２７日　　本館研修室

主要議題　（１）平成７年度文化財課事業計画の概要について

（２）平成７年度考古展の普及について

（３）平成７年度考古資料館の事業計画について

第２回　　３月１９日　　本館研修室

（１）平成７年度事業報告

（２）平成８年度事業計画案について

7. 受贈資料・図書・書籍

館報・年報類

No.	資料名	発行者名
1	吉備路郷土館　NO. 18	吉備路郷土館
2	博物館だより　NO, 77	斎藤報恩会自然史博物館
3	滋賀埋文ニュース　第189号	
4	斎藤茂吉記念館年報　平成６年度	斎藤茂吉記念館
5	山形県立博物館ニュース　第122～125号	山形県立博物館
6	山形県立博物館報　平成７年度	山形県立博物館
7	山形市　野草園だより　５号	山形市野草園
8	山形大学付属博物館報２１	山形大学付属博物館
9	長井市古代の丘資料館館報　第２号	長井市古代の丘資料館
10	天童市立旧東村山郡役所資料館　展示案内	
11	天童廣重　広重美術館準備室ニュース第１号	広重美術館準備室
12	芭蕉記念館だよりNO. 3	山寺芭蕉記念館
13	米沢市立上杉博物館年報　vol. 6	米沢市立上杉博物館年報
14	夕鶴　友の会会報第２号	夕鶴の里
15	年報　平成６年度	山形県埋蔵文化財センター
16	米沢市文化財年報　no. 8	米沢市文化財年報
17	埋文やまがた　第１～３号	山形県埋蔵文化財センター
18	岩手県立博物館　年報　平成６年度	岩手県立博物館
19	岩手県立博物館だより No. 65～68	岩手県立博物館
20	秋田県立博物館　館報　平成６年度	秋田県立博物館
21	秋田県立博物館ニュース　No. 99～103	秋田県立博物館
22	仙台市博物館年報　第２２号　平成６年度	仙台市博物館
23	苫小牧市博物館だより　NO. 31～33	苫小牧市博物館
24	年報　平成６年度版	苫小牧市博物館
25	農業博物館だより　NO. 58～59	岩手県立農業博物館
26	研究紀要　第１号　郡山市	（財）郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
27	広報　文化財　49～51	仙台市教育委員会
28	秋田県立埋蔵文化財センター　研究紀要　第10号	秋田県埋蔵文化財センター
29	秋田県立埋蔵文化財センター年報　13　平成６年度	秋田県埋蔵文化財センター
30	千葉県立房総風土記の丘年報17　平成５年度	千葉県立房総風土記の丘
31	栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報　第９号	栃木県教育委員会
32	房総風土記の丘だより　第31号	千葉県立房総風土記の丘
33	房総風土記の丘年報　18 平成６年度	千葉県立房総風土記の丘
34	あるむぜお　NO. 31～33	府中市郷土の森
35	さきたま　NO. 7	埼玉県立さきたま資料館
36	茨城県立歴史館ガイドブック	茨城県立歴史館
37	横浜市歴史博物館ニュース　2	横浜市歴史博物館
38	江戸東京　たてもの園だより６	（財）東京都歴史文化財団
39	江戸東京博物館NEWS vol. 11～12	（財）江戸東京歴史財団
40	江戸東京博物館研究報告　1	江戸東京博物館
41	桜土手古墳展示館だより　Vol. 10～11	秦野市立桜土手古墳展示館
42	山梨県立考古博物館だより　No. 33～34	山梨県立考古博物館
43	市立市川考古博物館年報　第21号～22	市立市川考古博物館
44	資料館報　NO. 26 1995	埼玉県立さきたま資料館
45	松戸市博物館年報　第１号　平成５年度	松戸市立博物館
46	なりた　No. 61～63	成田山霊光館
47	栃木県立なす風土記の丘資料館年報　第２号	栃木県立なす風土記の丘資料館
48	府中市郷土の森　年報　第８号　平成５年度	府中市郷土の森
49	歴博　71 ～75	国立歴史民俗博物館
50	かながわ考古学財団　年報１　平成５年度	（財）かながわ考古学財団
51	たまのよこやま　no. 29～30	東京都埋蔵文化財センター

No.	報　告　書　名	発　行　者　名
4	第22集　畑田遺跡中野遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター
5	第23集　大坪遺跡第２次発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター
6	第24集　北目長田遺跡橇待遺跡堂田遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター
7	第25集　上高田遺跡木戸下遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター
8	第26集　西谷地遺跡第２次・西ノ川遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター
9	第27集　廻り屋遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター
10	第28集　亀ヶ崎城跡第３次発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター
11	第29集　渋作遺跡発掘調査報告書	山形県埋蔵文化財センター
12	米沢市　第47集　遺跡詳細分布調査報告書第8集	米沢市教育委員会
13	米沢市　第48集　一ノ坂遺跡発掘調査概要第5集	米沢市教育委員会
14	米沢市　第49集　矢子山城跡調査報告書第2集	米沢市教育委員会
15	米沢市　第50集　我妻舘発掘調査報告書	米沢市教育委員会
16	米沢市　第51集　直江石堤発掘調査報告書第2集	米沢市教育委員会
17	下小松古墳群（１）	山形県川西町
18	寒河江市内遺跡　発掘調査報告書（２）	寒河江市教育委員会
19	白鷹町　廻り屋遺跡　　白鷹町教育委員会	
20	市内遺跡発掘調査報告書(2) 座須脇遺跡の調査他	長井市教育委員会
21	市内遺跡発掘調査報告書(3) 唐梅遺跡の調査他	長井市教育委員会
	高畠町第３集　金谷・上光田遺跡、大笹生熊野神社	高畠町教育委員会

<県外報告書>

No.	報　告　書　名	発　行　者　名
1	南麦台遺跡	(財) 山武郡市文化財センター
2	油井古塚原遺跡丑子台　1037地点	(財) 山武郡市文化財センター
3	古内遺跡	(財) 山武郡市文化財センター
4	京都市埋蔵文化財調査概要　平成３年度	(財) 京都市埋蔵文化財センター
5	史跡宮沢遺跡「愛　山地区」保存整備報告書	宮城県古川市教育委員会
6	調査研究報告　第８号	埼玉県立さきたま資料館
7	江上館跡３	新潟県北蒲原郡中条町
8	扇田町遺跡　発掘調査の概要	名古屋市教育委員会
9	高蔵遺跡　第６次調査の概要	名古屋市教育委員会
10	古沢町遺跡　発掘調査概要報告書	名古屋市教育委員会
11	志賀公園遺跡　第２次発掘調査概要報告書	名古屋市教育委員会
12	春日野町遺跡　発掘調査の概要	名古屋市教育委員会
13	石神遺跡　玉ノ井遺跡　高蔵遺跡(第７次)発掘調査報告書	名古屋市教育委員会
14	京都市埋蔵文化財調査概要　平成４年度	京都市埋蔵文化財研究所
15	三春城下　近世追手門前通遺跡群Ｂ地点発掘調査報告書	福島県三春町教育委員会
16	馬門南遺跡　栃木県埋文165集	栃木県教育委員会
17	横倉宮ノ内遺跡　161集	栃木県教育委員会
18	谷近台遺跡　167集	栃木県教育委員会
19	塙平遺跡Ⅱ　163集	栃木県教育委員会
20	長福城跡　158集	栃木県教育委員会
21	猿渕遺跡　155集	栃木県教育委員会
22	那須官衙関連遺跡Ⅱ　157集	栃木県教育委員会
23	下野国分寺跡ＸＩ　墨書土器・施釉陶器編　156集	栃木県教育委員会
24	槻沢遺跡Ⅱ　164集	栃木県教育委員会
25	乙畑・大久保古墳群　159集	栃木県教育委員会
26	253集　吉野遺跡	秋田県教育委員会
	東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸⅨ	
27	254集　寒沢遺跡　曲田地区農免農道整備事業に係る	秋田県教育委員会
28	255集　中の沢遺跡　県営ほ場整備事業に係る	秋田県教育委員会
29	256集　家の下遺跡(1)　県営ほ場整備事業に係る	秋田県教育委員会
30	257集　払田柵跡　第102次調査	秋田県教育委員会

No.	図　　録　　名	発　行　者　名
5	古代人の原像ーかお・手・あしー	山形県立博物館
6	天童の板碑-石にこめる願い-	天童市立旧東村山郡役所資料館
7	企画展高畠の近いむかし7.11.1	高畠町郷土資料館
8	未来のノスタルジー山形・同時代作家展	山形美術館

<県外図録>

No.	図　　録　　名	発　行　者　名
1	村内古墳出土品展	玉里村立史料館参考展示解説
2	払田柵を掘る　-調査20周年記念誌-	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
3	特別展　地球を見つめる小さな目-昆虫たちの世界-	秋田県立博物館
4	山王遺跡-第17次調査-出土の漆紙文書	多賀城市教育委員会
5	一橋徳川家名品図録	茨城県立歴史館
6	茨城の須恵窯跡	茨城県立歴史館
7	音の考古学-音具と鳴器の世界-	茨城県立歴史館
8	古墳時代の茨城	茨城県歴史館
9	企画展　海に暮らす縄文の人	玉里村立資料館（茨城県）
10	第51回企画展　海の正倉院沖の島　古代の祭祀西・東	群馬県立歴史博物館
11	古墳時代の飾り馬	松戸市博物館
12	企画展　稲と魚　水田をめぐる漁・猟・採集	松戸市立博物館
13	松戸市立博物館　常設展示図録	松戸市立博物館
14	厚手式土器の故郷　平成７年度企画展	神奈川県秦野市立桜土手古墳展示館
15	平成７年度企画展示図録　住まいと集落	千葉県立房総風土記の丘
16	企画展貝塚の謎を探る・２　陸奥の貝塚	千葉市立加曽利貝塚博物館
17	むかし人の生活と生産	都立埋蔵文化財調査センター
18	多摩ニュータウンの遺跡と遺物	都立埋蔵文化財調査センター
19	あかりの今昔-光と人の江戸東京史	東京都江戸東京博物館
20	葛飾北斎展　江戸のメディア絵本・版画・肉筆画	東京都江戸東京博物館
21	江戸の夏＝その涼と美＝	東京都江戸東京博物館
22	江戸歌舞伎＝歴史と魅力＝	東京都江戸東京博物館
23	東京大空襲　戦時下の市民生活	東京都江戸東京博物館
24	錦絵の誕生　江戸庶民文化の開花	東京都江戸東京博物館
25	古代の集落ーしもつけのムラとその生活ー	栃木県教育委員会
26	なす風土記の丘第３回企画展 豊かな恵みの中で-なすの縄文人-	栃木県教育委員会
27	祭と政-古墳時代のまつりのかたち-	安土城考古博物館
28	第８回企画展　東家文書は語る　江戸時代の安土	安土城考古博物館
29	邪馬台国と大和王権　倭国	京都国立博物館
30	倭国　邪馬台国と大和王権	京都国立博物館
31	よみがえる二上山の３つの石　二上山博物館展示解説	香芝市二上山博物館
32	「纒向のマツリ」展95冬季企画展	桜井市立埋蔵文化財センター
33	第９回企画展-蒲生・神崎郡展-　蒲生野の古代史	滋賀県立安土城考古博物館
34	観音寺城と佐々木六角　平成７年度秋季特別展	滋賀県立安土城考古博物館
35	第10回企画展　いにしえの渡り人　近江の渡来文化	滋賀県立安土城考古博物館
36	鏡の時代-銅鏡百枚-　平成７年度春期特別展	大阪府立近つ飛鳥博物館
37	大阪府立近つ飛鳥博物館　常設展示図録	大阪府立近つ飛鳥博物館
38	平成７年度秋季特別展　古代人名録　戸籍と計帳の世界	大阪府立近つ飛鳥博物館
39	古代の群像　　俑と埴輪　平成７年度冬季企画展	大阪府立近つ飛鳥博物館
40	「纒向型前方後円墳とそのひろがり」展　関東編	奈良県桜井市埋蔵文化財センター
41	弥生のかたち	広島県立歴史民俗資料館
42	古墳誕生の謎をさぐる　-特殊器台からはにわへ-	広島県立歴史民俗資料館
43	死と再生の文化　展示解説資料集	高知県立歴史民俗資料館
44	企画展　土佐藩主　山内家の名宝	高知県立歴史民俗資料館

8. 日　誌　抄

4／3	辞令交付式
4／25～4／26	特別展示準備
4／27	特別展「よみがえる縄文文化」開展式、第１回本館運営協議会
5／5	子どもの日無料開館日　１７０名入館
5／29	県議会総務常任委員会視察
6／10	特別講演会「三内丸山遺跡と東北の縄文文化」　岡田康弘氏 160名参加
6／13	福島県立博物館資料調査・鶴岡市文化財保存会　１５名見学
6／20	中国青海省視察団来館
7／8	縄文土器作り教室　３３名参加
7／26	岩手県議会議員１２名視察来館・文化庁　原田調査官来館
8／5	収蔵品展「高畠古墳時代」　開展
8／6	縄文土器作り教室（野焼き）
8／8	明治大学　小村三郎教授、北京大学　李副教授他　学生来館
8／12	第１回考古学入門講座「日本やきものの流れ」
8／20	第２回考古学入門講座「土器のはじまり」
8／29	東北歴史資料館　桑原・藤沼氏ら来館
9／2	第３回考古学入門講座「縄文土器の発展」
9／9	屋代地区少年教室見学（勾玉つくり）
	縄文体験教室・月見の宴（山形市霞城公園）
9／24	第４回考古学入門講座「縄文土器のおわり」
9／27～9／30	第４回企画展「やまがた古代の役所」準備
10／1	第４回企画展開展
10／7	特別講演会「古代出羽の役所」　小野　忍氏
10／13	宮城県教職員互助会　２８６名見学
10／14	第５回考古学入門講座「弥生土器の展開」
10／17	高畠町デイケアサービス　１６名見学　以後１０月末まで
10／22	第６回考古学入門講座「須恵器窯の試掘（体験学習）、味噌根窯跡発掘開始
11／3	文化の日（無料入館日）　１５名入館
11／11	第７回考古学入門講座「古墳時代の土器」
11／19	第８回考古学入門講座「古代の土器」
11／25～11／26	東北中世考古学会　７０名参加
11／28	多賀城調査研究所　進藤所長他　来館
11／30	第４回企画展閉展
12／5	収蔵品展「置賜地方のやきものの移りかわり」開展
12／6	文化庁より芹沢長介文化財審議委員、田辺征夫文化財調査官　来館
12／9	第９回考古学入門講座「中世のやきもの」
12／17	第１０回考古学入門講座「近世山形のやきもの」及び閉講式
12／20	味噌根窯跡発掘調査完了埋め戻し
1／21	東京国立博物館　松浦宥一郎氏、韓国国立中央博物館考古部長　韓永□氏ら来館
1／21	文化庁　原田調査官来館
2／25	縄文体験教室「縄文住居模型つくり 10名参加
3／19	第2回本館運営協議会

山形県立うきたむ風土記の丘
考古資料館調査研究報告　第１集

山形県高畠町

味噌根窯跡第一次発掘調査の概要

１９９５

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

目　　次

例　　言

調査要項

1．発掘調査にいたるまで ---------- 3

2．味噌根窯跡群の位置と環境 ---------- 4

3．発掘調査の経緯 ---------- 6

4．窯体とその構造 ---------- 9

5．出土の遺物 ---------- 12

6．考察と課題 ---------- 19

例　　言

1．本報告は、１９９５年度に実施した高畠町と県考古資料館の主催による第２期考古学入門講座の体験学習として行った「須恵器窯跡の発掘」が契機となり、その後本資料館が引き続き調査を行った「味噌根窯跡群」のなかの２基の窯跡についての調査報告書である。

2．調査地の所在や期間、調査体制については別項に記した。

3．調査にあたっては、土地の所有者の田口晃氏、発見通報者の深瀬吉男氏より絶大なご理解とご協力をいただいている。記して感謝申し上げる。

　また、発掘にあたっては、山形県教育委員会文化財課、高畠町教育委員会文化課よりご指導と助言をいただいている。

4．発掘作業は、秋の終わりから小雪の舞う初冬まで及んだが、すべて考古学入門講座の受講者の方々、うきたむ考古の会の会員の皆様による自主参加とボランティアによるものである。発掘作業に参加された方々の氏名は、別項に記した。その労に深く謝意を表したい。

5．遺物の整理は、本館職員があたり、本報告書の執筆、図版作成は本館職員の協力を得て川崎利夫がおこなった。また測量は、長南憲一・長瀬一男・長瀬えみ子・水戸弘美の各氏の協力によるものである。

調　査　要　項

1．遺跡名　　味噌根（ミソネ）窯跡群

2．所在地　　山形県東置賜郡高畠町大字安久津字味噌根２１６５～２１６６番地

3．土地所有者　高畠町大字安久津　田口　晃

4．遺跡の現状　果樹園（ぶどう園）

5．発掘調査遺構　味噌根１号窯及び２号窯

6．遺跡の時代　　奈良時代（８世紀）

7．調査主体　山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

8．調査担当　県立考古資料館館長　川崎利夫

　　米沢市教育委員会　　手塚　孝

9．調査発掘期間　　１９９５年１０月２２日～１２月２０日

10．調査参加者

考古学入門講座第２期受講者

伊沢良治　大沼与左衛門　唐沢幹雄　小島才吉　寒河江俊雄

佐藤美保子　須崎寛二　鈴木恵美子　高梨善三郎　高橋恒三

長瀬えみ子　村山賢司　三浦浩人　元木　実　渡辺　一

渡部由美子　渡部　薫

うきたむ考古の会

金子俊幸　金子　竹　小林貴宏　斎藤　仁　高橋良一

長南憲一　長瀬一男　水戸浩美

地元協力者

井田秀和（高畠町教育委員会）　田口　晃（地権者）　深瀬吉男

米沢市教育委員会

手塚　孝

県立考古資料館

川崎利夫　鈴木栄一　島津美智雄　宇佐美みふゆ　山村紀子

１．発掘調査にいたるまで

昨年の春、本資料館の近くにお住まいの深瀬吉男氏より、この近くのぶどう園から土器が出土しているということをおききした。そしてその後、採集された土器片を５・６片もってこられた。

それらは須恵器で、斜面の畑の下から拾われたとのことであった。なかに丸底でヘラけずりの痕のある破片があり、これまで山形県の窯跡からは見つかっていない古い形の須恵器であった。本館の近くの安久津１・２号墳からは、７世紀後半から８世紀前半ころの須恵器が出土している。これらのかなりの部分は、近くで焼成されたものだろうと考えていた。

６月中旬に深瀬氏により同道をお願いし、現場を観察することができた。山の斜面を開墾したぶどう園がひろがっており、傾斜にむかう麓の平坦部で、１０片余りの須恵器片と窯壁片を拾うことができた。

これは須恵器窯跡であり、しかもこれまで県内では未発見の古さをもつ窯跡で、近くの古墳群に供献された須恵器と関連をもつ窯跡であると推測された。

ぶどう園の所有者は、高畠町安久津の田口晃氏で、ご本人の了解もえて、７月１０日付けで「遺跡発見届」を文化庁長官あて提出した。

そして貴重な窯跡群の一端を解明することと、本資料館で実施している第２期考古学入門講座の体験実習もかねて、１０月下旬より雪の積もる直前の１２月下旬までの２カ月間に１基の窯を発掘することにした。

幸い田口晃氏のあたたかいご理解をえて、９月２０日付けで「遺跡発掘届」を提出した。１９９６年度前半期に本館では「山形県古代窯業遺跡展」の企画展を催すこともあり、時宜をえた発掘調査となった。機材等はすべて高畠町教育委員会より借受け、いろいろな期待をになって、１０月２２日に調査の鍬を入れることができた。

第１図　考古資料館からミソネ窯跡群を望む

などの各洞窟の他に、尼子・神立沢・観音岩などの洞窟・岩陰遺跡が調査されている。これらの遺跡はすべて北を限る山地に分布する。

また平地部には、漆塗り彩文土器を出土した押出遺跡がある。これは縄文前期後半の遺跡であるが、縄文時代の初頭から弥生・古墳・古代まで間断なく人びとが生活した地域である。

古代末期には、奥州平泉藤原氏が管理する関白藤原忠実よりその子の頼長に引きつがれた「屋代荘」があった。南北朝期には福島より伊達氏が進出し、戦国期まで伊達氏の拠点でもあった。

このように歴史的環境からいっても重要な地域であり、ここに県内最古の須恵器窯跡群が存在するのも偶然ではない。

３．発掘調査の経緯

発掘調査の開始は１０月２２日で、窯体を２基発掘し、灰原のみ未調査であるが、１２月２０日まで約２カ月をへてようやく完了した。調査はすべて有志による労力提供によって行われた。

調査日誌をたどってその経過を追ってみよう。

・１０月２２日（日）　　曇

第２期考古学入門講座の受講者１６名出席。研修室で手塚孝講師による古代窯業遺跡の概要を受講した後、午後２時器材を手分けして持って現場にむかう。総勢２０名。

手塚氏の指導のもと、斜面地下の平坦部分に６×６㍍（３６平方㍍）のグリッド設定。表土を剥ぐにつれて土器片が数多く出土する。まるい弧線をえがいて、ほぼ円形を呈する径２．５㍍ほどの土壙の輪郭があらわれる。これは２つあり、つながっている。窯の焚口下の灰原である。したがって、隣りあう２つののぼり窯があると推定される。灰原の存在を確認し、左手の窯の焚口部が表れたところで４時作業を終了する。

・１０月２５日（水）

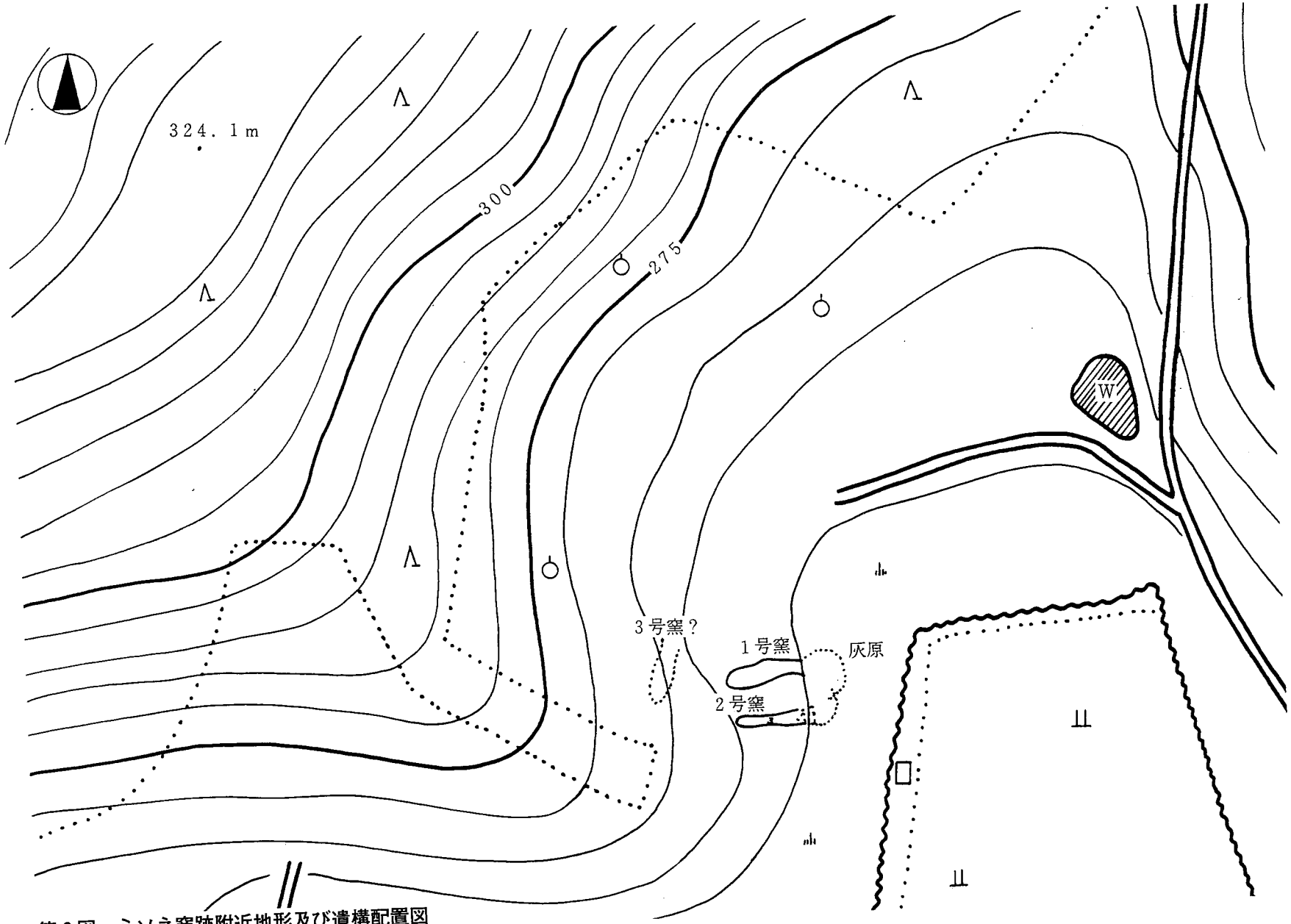
２２日の調査で出土した土器片３１０片を洗浄、整理分類する。

・１０月２８日（土）　　晴　　（川崎・島津）

３６平方㍍のグリッド上方に、窯体をさぐるため６㍍（Ａトレンチ）、及びその上方に５㍍（Ｂトレンチ）を設定して掘り下げる。Ａトレより円面硯の破片を発見。Ｂトレンチにおいて１号窯の落ちこんだ屋蓋部と焼土層を検出。１号窯の存在が明らかになる。

・１０月２９日（日）　　曇　　（川崎・宇佐美・山村・井田・深瀬・渡辺）

午後より作業、ＡトレとＢトレを接続。１号窯の輪郭がほぼ確認される。２号窯の窯尻もあらわれる。



第6図　ミソネ窯跡附近地形及び遺構配置図

４．窯体とその構造

北から南にむかってのびる尾根の山麓の傾斜転換部の平坦地に灰原を置く２基の窯跡は、３．２メートルの間隔をおいて、ほぼ主軸方向を東西に傾斜面にそって平行にもうけられている。北側の窯跡を１号窯、南窯のものを２号窯という。ただし１号窯は、５度ほど南にぶれる。１・２号窯の上部西側８メートルの地点にも３号窯が存在すると推定され、灰原が確認されたがこれは未調査である。いずれも「半地下式無段登り窯」である。

これら３基の窯跡の南側にもその存在が推定されるが、原野になっており現状では確認が困難である。以下発掘した１号窯と２号窯についてその様相を述べることにする。

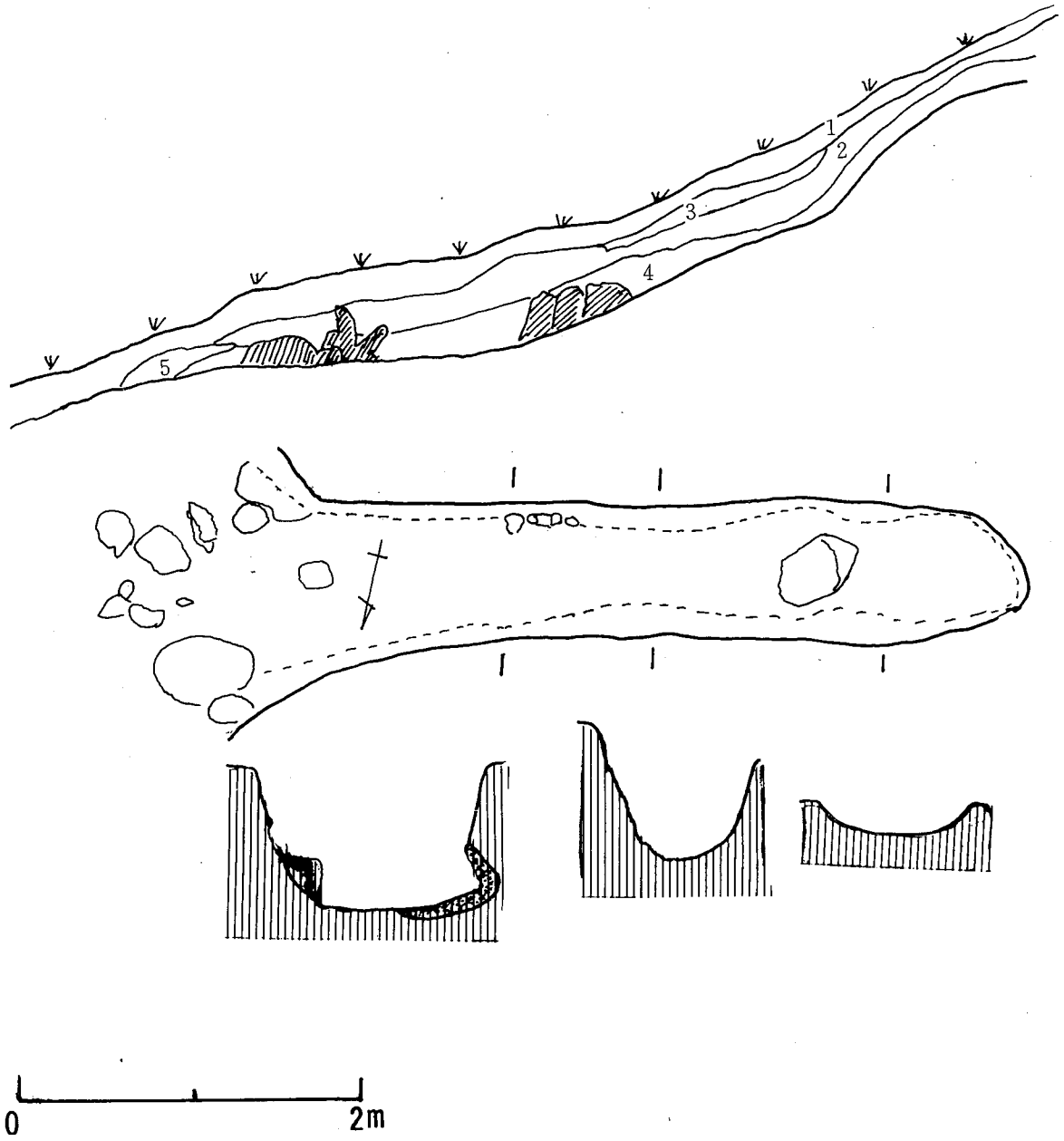
〔１号窯〕（第７図）

北側に位置する窯である。焼成部より上部は保存状態が良好であるが、燃焼部と焚口部が開墾の際の深堀りによって攪乱されていて窯底や側壁の検出が困難であった。規模は、全長５．５メートルと小型である。最大幅１．５メートル、斜面を長い長方形に掘り込み、床面と側壁に粘土を貼り屋根を被せた半地下式無段登り窯である。焼成部で確認された床面や側壁を観察するかぎり２次焼成や補修の痕跡は認められなかったので、短期間に使用され廃棄されたものであろう。

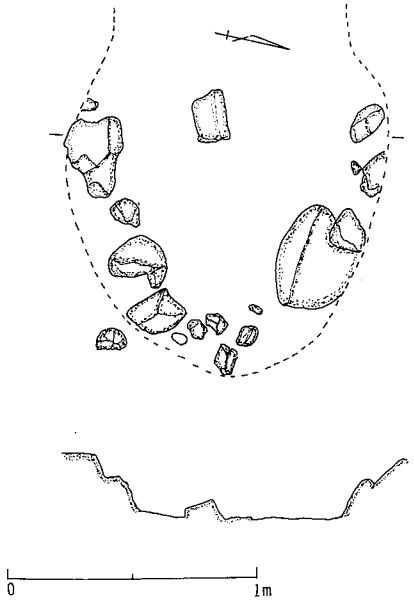
床面の傾斜角は燃焼部で４０度、焼成部できわめてゆるやかで１０度であった。煙道部は急にたちあがる。窯内からの出土遺物は須恵器の壁や壺の破片が少量であった。窯壁が付着した土器片も認められた。焚口や前庭部には焼土や炭火物とともに土器破片も比較的に多く発見されている。焚口部や燃焼部の大半が破壊され、攪乱の状態であったので、下部は断面に表れた床面などによって推測した。図面では下部がカーブをえがいてやや狭まるようであるが、広がる可能性もあり、今後さらに検討が必要である。なお床面がよく残っていた焼成部の現地表からの深さは５０～６０センチであった。窯の横断面図に屋蓋部が落ち込んだ状況が観察された。そこでは、床から立ち上がる側壁の一部も確認できた。

〔２号窯〕（第８図）

１号窯にほぼ平行して隣接する。１号窯の南側３．２メートルの位置である。良好な状態で窯体が検出されている。全長５．４メートル、幅は燃焼部もほぼ同じで９０～９５センチときわめて狭く小型である。焚口部でやや広がるがそれでも１０５センチ程度である。現地表より床面までの深さは、最も深い燃焼部で６０センチ、煙道部で２６センチである。焚き口部には、半円形に人頭大から拳大の石を配置している。燃焼部の左側壁にも石があったが、これは後に上からずり落ちたものであろう。 焼成部の右側壁の一部に厚さ３．５センチほどの粘土による床面と立ち上がる窯壁の一部が残存していたが、側壁が著しく内屈していた。上からの土圧によって内側に傾いているのであろうと考えられる。

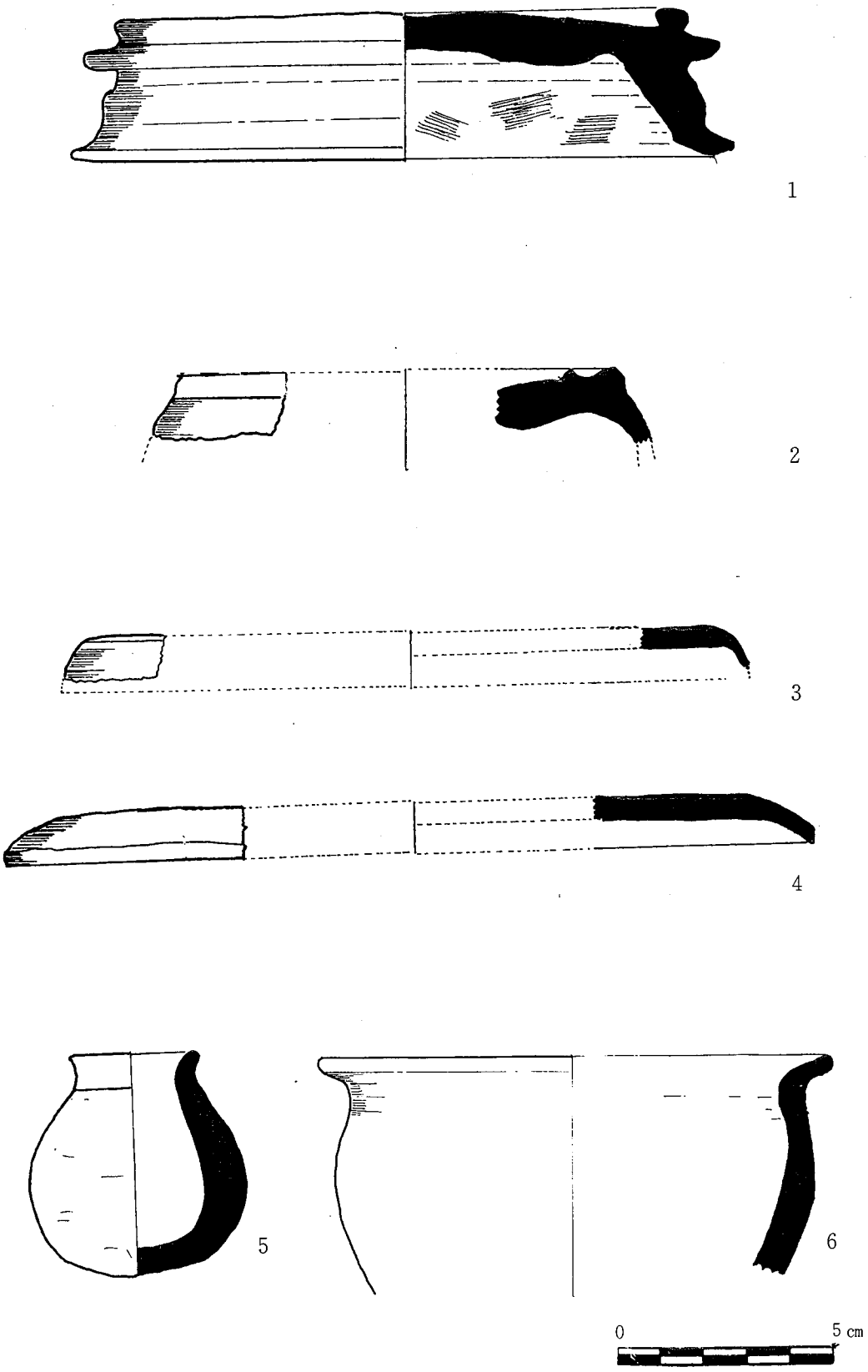


第８図　ミソネ２号窯実測図

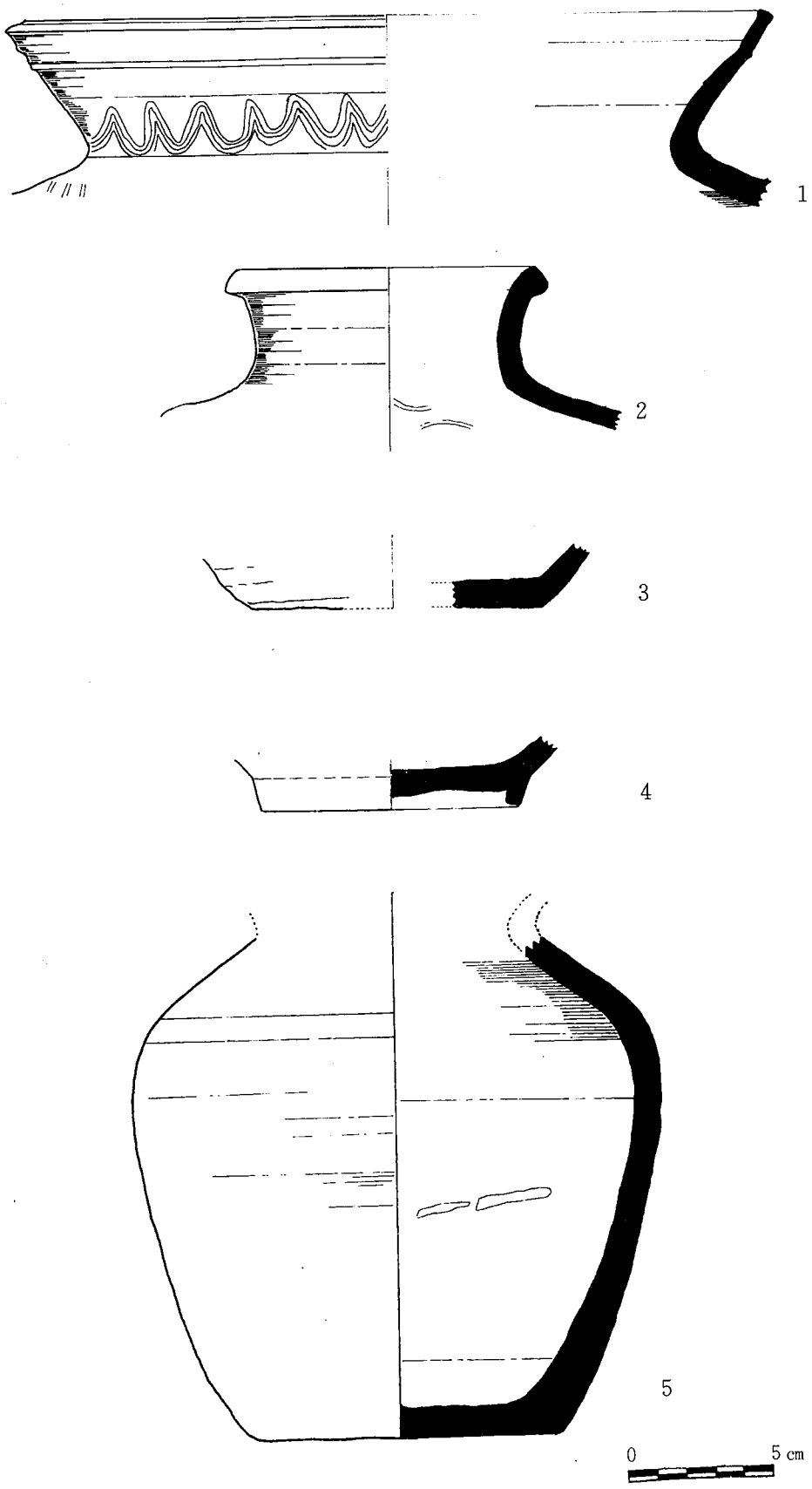


1．黒褐色土（表土）
2．黄褐色土（木炭片混入）
3．黄褐色粘質土層
4．黄褐色焼固土層
5．黒色灰炭土層

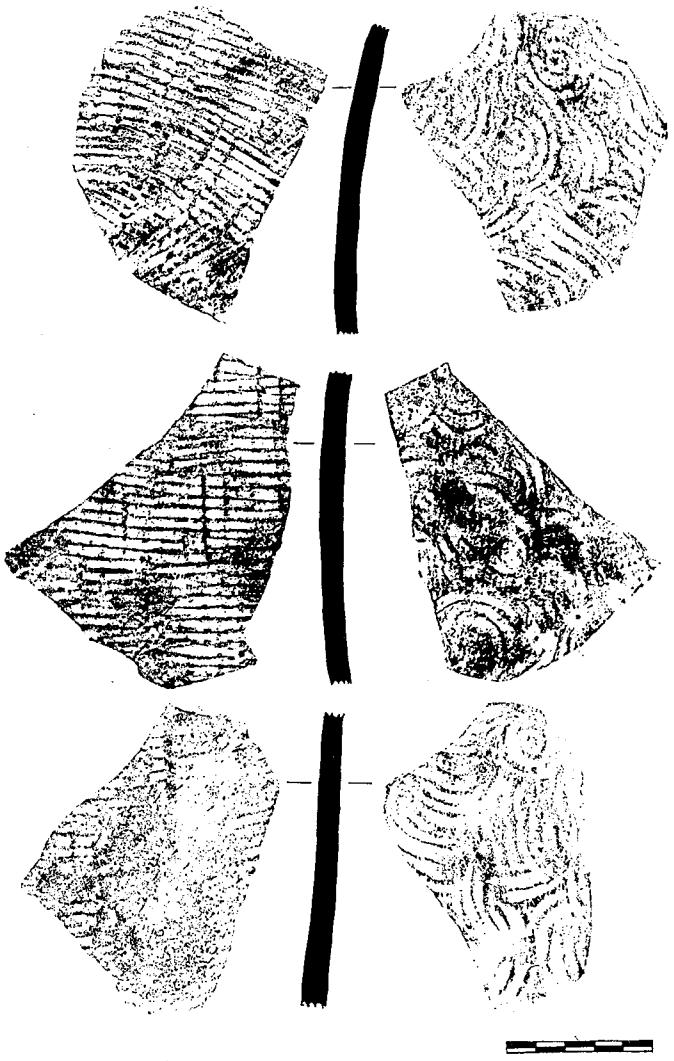
第８図　ミソネ２号窯焚口部の配石実測図



第10図　円面硯・蓋・小壺



第12図　壺及び甕など



第14図　甕及び壺の表裏叩き目拓影

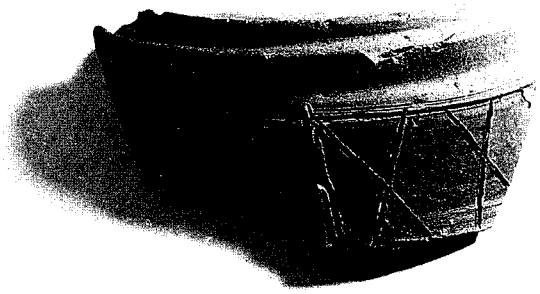
６．考察と課題

高畠町安久津の北側丘陵の東斜面に存在する味噌根（ミソネ）須恵器窯跡群の２基の窯跡を発掘した。さらに南側の斜面にも窯が分布すると予想されるが、萱原となっており地表からの観察からはわからない。１・２号の上方にも１基あるらしいので、いまのところ３基は確実に存在することになる。

１・２号窯ともに窯体はいたって小規模で、全長５．５メートル前後、幅１から１．５メートル程である。２号窯がよく床面や窯壁を一部残しており、焚き口には石を配してその構造をうかがうことができる。

２号窯の焚き口付近より、円面硯が２個体分発見されたが、この窯跡群の性格をさぐる上で重要である。高畠町内では、大字高畠の大在家遺跡において、円面硯破片５点が出土している。この遺跡は、１９９１～９２年高畠町教育委員会によって緊急調査されたもので、7世紀後半より８世紀初頭の須恵器などが出土している。いずれも破片であるが、４０パーセントを残す円面硯は、硯面径９．８センチ、高さ４．３センチで脚台部に長方形の透かしがあり、そのあいだに×の沈線による文様が描かれる。（第15図）大在家遺跡は、７世紀後半より８世紀始めに機能したと考えられる陸奥国置賜郡の郡衙跡にあてられる小郡山のすぐ西側に位置し、郡衙遺跡との関連を思わせる注目すべき遺跡である。

ミソネ窯跡群も、同時期の古いタイプの円面硯を出土したことは、その南１．５キロに所在すると考えられる郡衙跡との関連をもつ官窯であったと推測するに充分である。その他近くにおいては、亀が森遺跡よりも同種の円面硯が出土しているという。置賜地域では、小郡山から移転した郡衙であろうと考えられる南陽市郡山の近くにある島貫遺跡より無脚円面硯と沢田遺跡より転用硯、米沢市笹原遺跡より脚台に円孔が穿たれ樹木状の文様を描いた円面硯など３点、上浅川遺跡より転用硯、延暦２３年の漆紙による具注暦が発見され、その前後の郡衙と推定され、その前後の郡衙と推定されている大浦Ｂ遺跡から二面硯の破片と脚台に長方形の窓を有する円面硯破片が出土している。やはり９世紀後半代の郡衙とみられる川西町道伝遺跡より、二面硯、風字硯、転用硯が出土している。置賜地域においては、おおむね郡街推定遺跡やその周辺に多く、９遺跡をかぞえる。県内では、９世紀から１０世紀前半に機能していたと考えられる出羽国府の酒田市城輪柵遺跡やその周辺遺跡からの発見が多く、最近平田町山海窯跡群から風字硯と二面硯５点、円面硯１点が出土している。県内全体の陶硯の出土地は３０遺跡で、５０点を越える数に



第15図　高畠町大在家遺跡出土の円面硯
（高畠町教育委員会保管）

なるであろう。

さてミソネ窯の年代はいつ頃であろうか。須恵器の編年の指標となっているのは、技法や形態が時期によって変化し、量も多い坏である。ところがこの窯では坏が極めて少ないので年代の決定については苦慮する。数少ない坏形土器はおおむね次のようなものである。

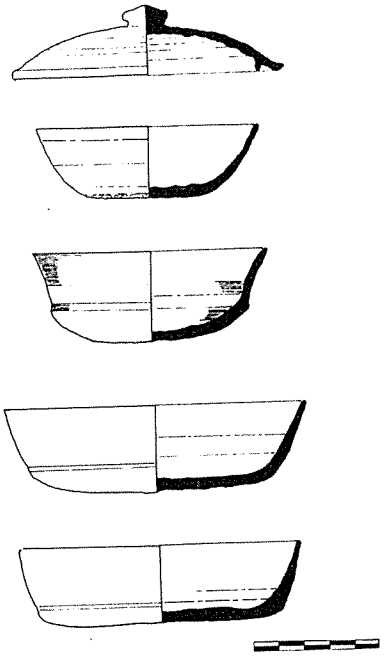
1．回転糸切り底で、体部最下部に回転ヘラ削りのあるもの。

2．底部から体部へ丸みをもってたちあがり、底部にヘラによる調整がおこなわれるもの、ロクロからの切り離しはヘラによっておこなわれる。

3．底部から丸みをもってたちあがり、口縁部が直立するやや深い椀に近いものなどがある。

東北地方においては、7世紀後半より8世紀初頭にかけて、丸底であった須恵坏が次第に平底に変わっていく。蓋もドーム状天井の丸みを帯びたものが、扁平化し宝珠型などのつまみをみつようになる。その階段では、平底に変化しても底部や体部下半にヘラによる調整をおこなって、底部と体部の境界を丸みをもって仕上げているものが多くみうけられる。ミソネ窯の須恵器と同様な技法をもつ須恵坏は、宮城県色麻村日の出山窯跡群、同湧谷町長根窯跡群、三本木町下伊場野窯跡群などから出土したもののなかに類似するものを認めることができる。これらは8世紀後半の多賀城創建期前後の窯跡と考えられている。3のような椀型の坏は、仙台市郡山遺跡の官衙遺跡や福島県相馬市善光寺窯跡群中の7世紀後半から8世紀初頭の窯から出土をみる。

これまで山形県内ではもっとも古いとみられてきた米沢市木和田における地下式登り窯の須恵坏は、ロクロからの切り離しがヘラにより体部下部が手持ちヘラ削り調整が行われている。これには8世紀前半の年代が与えられている。ミソネの場合は、これよりも小ぶりであり、ヘラの跡は消されている。それに回転糸切りや回転ヘラ削りの技法、3のような椀に近い小型の坏がないことなどから、その様相に違いがある。また本窯跡出土の須恵器の特色として通常もっとも多くみられる坏がきわめて少ないことは、個々の窯による器種焼成における機能分担の違いがあったのか、あるいは土器における供膳形態としての坏や椀が土師器が主体であり、それが定着する以前のかのいずれかであろうが、後者の可能性が高い。従って本窯跡の年



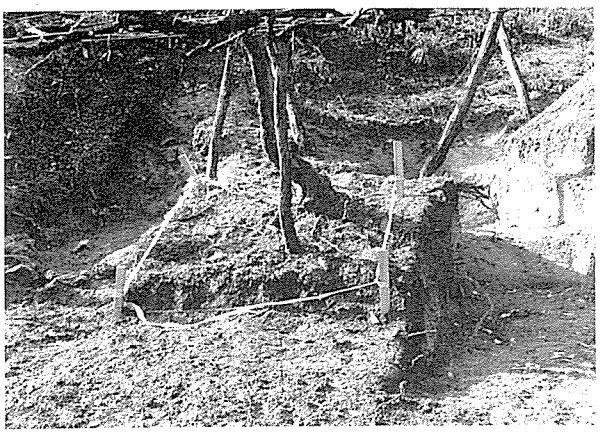
第16図　安久津2号墳出土の須恵器蓋及び坏
(高畠町教育委員会保管)

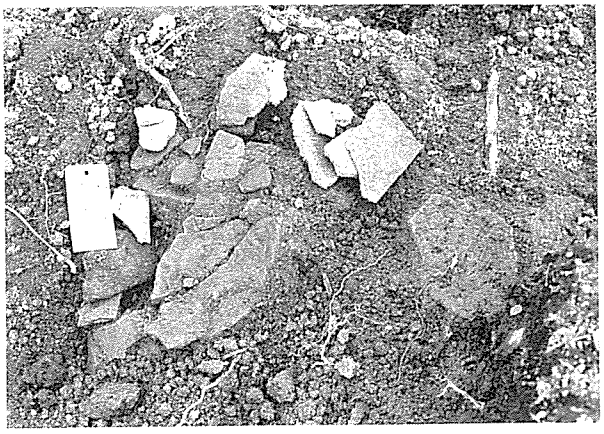
代については、木和田窯より遡り、８世紀初頭の第１四半期にもとめられるが、今後検討の余地を残すものであり、資料の増加によって確定されるであろう。なお、前頁に掲げた実測図は、本館の敷地内にある安久津２号墳の前庭部などから出土した須恵器の蓋や坏である。蓋は善光寺２Ａ期（７世紀第２四半期）からみられ仙台市郡山遺跡などからも出土しているカエリがつく小型のつまみをもつものである。坏も体部下半に、稜をめぐらしたり沈線を残す有段坏で下半部にはヘラ削りが施される。これらは７世紀の第３四半期の遺物と考えられるが、この類の須恵器は本窯跡からは今のところ発見されていない。これらの須恵器にもう一段階の変遷があって、ミソネ窯の製品に至るのであろうと思われる。

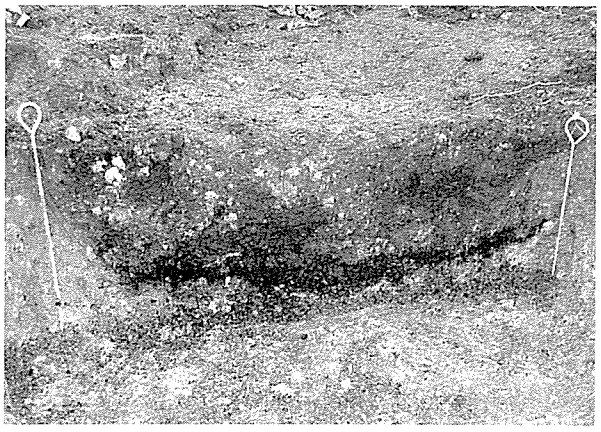
まだ１・２号窯の灰原の発掘調査が未完である。それとともに３号窯を来年度以降発掘の予定である。それらによる資料の増加にまつ以外にないが、さらにこれより古く遡り、７世紀代の窯跡で、近くの横穴式古墳に副葬された須恵器を焼成した窯跡の発見も可能性がある。いずれにしても、今のところ出羽国の律令制成立の時期に須恵器の生産が開始されたとの予測が成り立つものと思う。

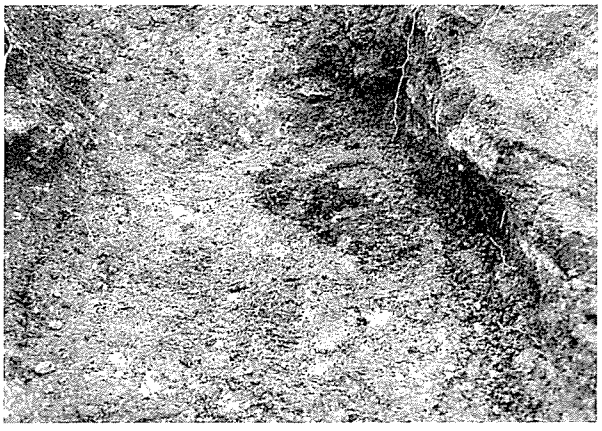
[主要参考文献]

・山形県教育委員会「山海窯跡群第２次発掘調査報告書」　１９９２
・米沢市教育委員会「笹原」　１９８１
・　　同　　「上浅川第３次発掘調査報告書」　１９８６
・　　同　　「大浦Ｂ遺跡発掘調査報告書」　１９９３
・手塚　　孝「米沢の古代文化」　まんぎり会　１９８６
・川西町教育委員会「道伝遺跡発掘調査報告書」　１９８４
・真室公一「米沢市木和田窯跡発掘調査報告書」　置賜考古第３号　　１９７２
・小野　忍「山形県内出土の陶硯」　庄内考古学１１号　１９７２
・村山正市「山形県内における奈良・平安時代の陶硯をめぐって」
　　さあべい１４号　１９８８
・工藤雅樹、桑原滋郎「東北地方における古代土器生産の展開」
　　考古学雑誌５９ノ３　１９７２
・岡田茂弘、桑原滋郎「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」
　　多賀城調査研究所　研究紀要１　　１９８８
・菊池佳子「多賀城以前の奥羽国と須恵器」　歴史８２編　１９９４
・福島県教育委員会「国道１１３号バイパス遺跡調査報告」４　１９８８
・木本元治「東北地方の飛鳥時代－考古学的視点より－」歴史８５編　１９９５
・高畠町「高畠町史　別巻　考古資料編」　１９７１



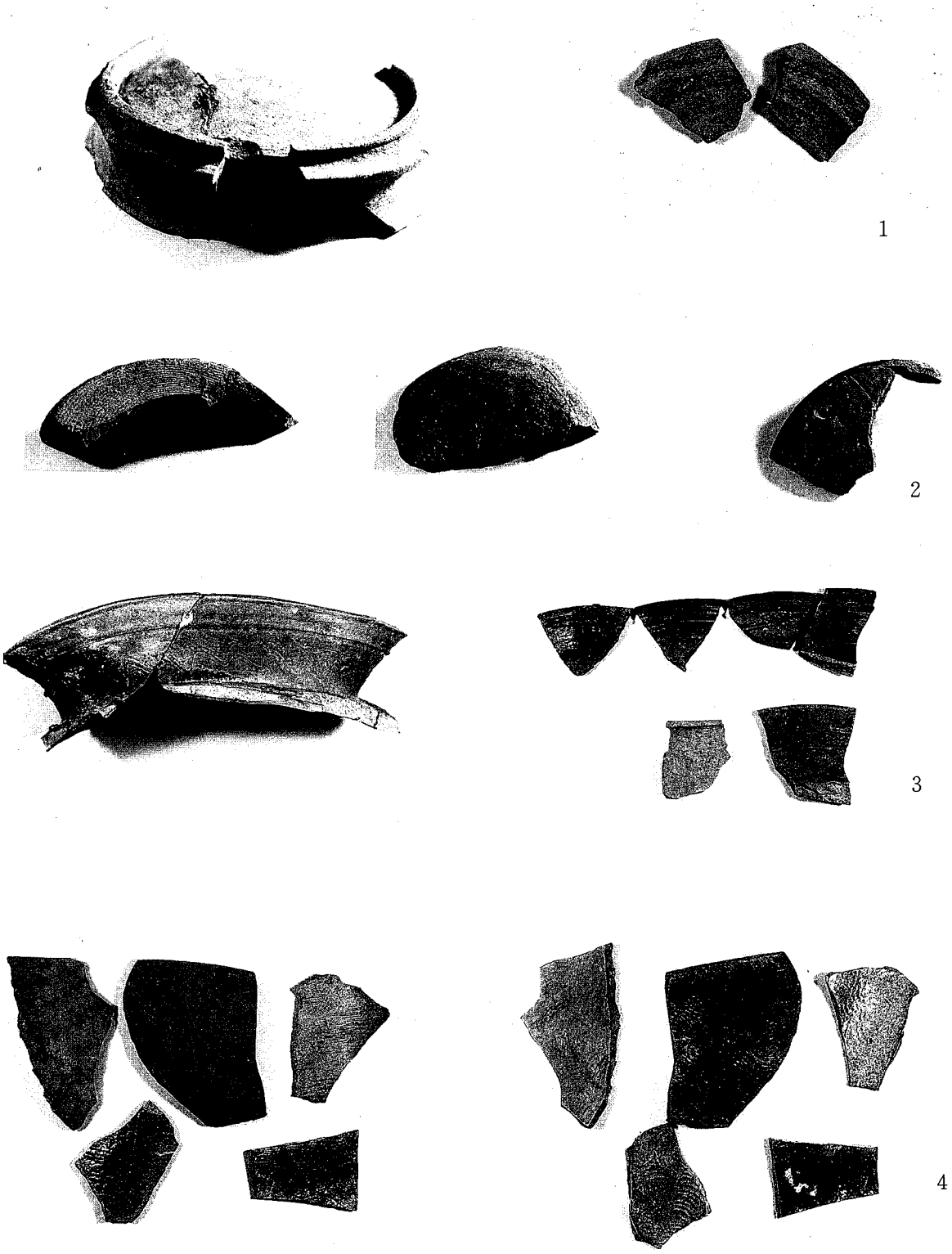






図版Ⅰ

上：左　1・2窯跡　　右　1号窯　焼成部土器出土状況
中：左　1号窯　　右　2号窯
下：左　1号窯焼成部断面　　右　2号窯　窯底と側壁



図版Ⅱ

1．出土した円面硯破片
2．坏の底部
3．甕の口縁部破片
4．甕・壺などの破片（外・内面の叩き目）

’95／年報

平成８年（１９９６年）　３月31日　印刷
平成８年（１９９６年）　３月31日　発行

編集発行　〒992-03
山形県東置賜郡高畠町大字安久津2117
山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
TEL 0238（52）2585
FAX 0238（52）4665
印　　刷　有限会社　高　畠　印　刷